

The Kotobagaki's in Shui-Wakashu and a verb 'Haberī' (3)

Hiroyuki Tadokoro

In the former articles (Kiyō No.33, 1999, and No.34, 2000), I demonstrated that the kotobagaki's in Shui-Wakashu, the third of the royal anthology of waka poetry compiled in about 1005, were really oral speeches given to the Tenno by the anthology selectors, as well as in the cases of foregoing Kokin-shu and Gosen-shu. They were regarded as the favorable data reflecting the spoken language of that age. And as its sequel, I researched the usage of 'Haberī', an ancient honorific verb, examining all the examples in those kotobagaki's one by one. But, I could not examine all the examples in the anthology, and left some kinds of words.

This time, I researched the remained 'Haberī's, or honorific forms of suffixes 'Ari' included to some auxiliary verbs. And through the total examination, I came to the conclusion, utterly the same to the one that I got before of Kokin-shu and Gosen-shu, that is, all the words were mainly used with a meaning, so called 'Kikite-sonkei' or 'Teinei-go', namely 'Hearer-respect', which expresses the respect of the speaker directly to the hearer in a conversation, and it also inferred that the words in the all cases are, at the same time, possible to mean the speaker's modesty, explaining respect to the person whom he concerns in a speech, so called 'Ukete-sonkei' or 'Kenjo-go'.

応用として、自然に（無段階的に）案出されたものと考えられるのである。（この考え方に立てば、「侍り」以外の謙讓語も丁寧表現に応用され得るわけで、事実それらの例が古今・後撰集の詞書中に多数見出されることは、別稿に述べたとおりである。）

これまで長く述べてきた聞手尊敬語「侍り」の成立に関する考察も、以上の観点に発するものであることを記して、本稿の筆を擱きたいと思う。

完

注

- (1) 拙稿「古今和歌集詞書に見る丁寧語『侍り』」（『茨城キリスト教大学紀要』第29号 平7・12）
同「後撰和歌集詞書と聞手尊敬語『侍り』」（同紀要30号 平8・12）
同「古今和歌集詞書に見る対象尊敬と聞手尊敬」（同紀要31号 平9・12）
同「後撰和歌集詞書に見る対象尊敬と聞手尊敬」（同紀要32号 平10・12）
- (2) 阪倉篤義「『侍り』の性格」（『国語国文』21巻10号（昭27・11）石坂正蔵『敬語史論考』（昭19・10）
杉崎一雄『平安時代敬語法の研究——「かしこまりの語法」とその周辺』（昭63・1）など。
- (3) 布山清吉「『侍り』の国語学的研究」（昭57・11）
- (4) 注（1）に同じ。

などの、為手が話し手と一致する形においては、現代人の多くが、聞手尊敬と並んで、話題中の為手である「私」の謙意を話し手として表現し、聞き手として理解していると感じるのであるまいか。そうしてさらに、謙讓語が丁寧語化したとされる、

・電車ガ到着イタシマス。

・雨ガ降ッテマイリマシタ。

といった、客觀的事物・現象を為手とする形においても、条件によっては、聞き手を高めるためにそれらのものをもへりくだって言う気持ちを、話し手が自ら感じ、また、聞き手が推察することがあり得ると思うのである。

むすび

以上、拾遺集詞書中の「侍り」の使われ方の実態を調査し、考察を加えてきた。その結果は先行古今・後撰集の場合と全く同じ、聞手尊敬表現(丁寧語)の成立過程の図式を示すものであったと言える。それを次に、再度略述して稿を終えたい。

敬語の体系が相対敬語の性格を強めるに従って、話し手は敬意を表すべき対象として、これまでの話題中の素材である為手と受け手の他に、眼前で自分の話を聞いている聞き手の存在を見出す。その聞き手を待遇するために、既存の敬語法を応用して、聞き手の人物と話し手自身とを話題の中に素材として取り込み、素材の話し手が素材の聞き手に働きかける動作を受手尊敬で表現することによって、結果的に素材と同一人物である眼前の聞き手を高める効果を得る、という方法が案出される。その際為手、すなわち話題に取り込まれた話し手の動作が、直接聞き手に働きかける意味を持たない自動詞その他であっても、その為手の動作をへりくだる言い方にすれば、その反転として間

接的に話題中の聞き手が高められることになり、他動詞の場合の受手尊敬と同等の効果を生じる。このような過程を経て、本来自動詞的な意味を有する「侍り」はその応用範囲を大きく広げ、謙讓語から発達した丁寧語の代表的存在として隆盛を誇るようになったと考えられるのである。こうして「侍り」は新出の聞手尊敬表現の機能を確立し、個々の用例において常に第一義としてその意味を表現するようになる。しかしその裏で、「侍り」の原義の為手卑下Ⅱ受手尊敬は完全に消失せず、広義の文脈に規定される話し手、聞き手それぞれの恣意に応じて、コミュニケーションの場にさまざまな程度で出沒する。このようにして「侍り」に始まった聞手尊敬表現は、成立以来質的にはこのような意味構造を堅持しつつ、量的には次第に発展して現代語における隆盛に到ったものと考えるのである。

私は基本的に、相対敬語化以後の日本語の敬語は、すべて話し手が話に関係する人物を自らの心情にもとづいて待遇する言葉遣いであると考え、話に関係する人物とは、話し手自身を除いては、話題中の素材としての為手・受け手、それに新しく見出された話題の外にいる聞き手の三種類以外には存在しない。従ってそれらに敬意を表する敬語も、為手尊敬・受手尊敬・聞手尊敬の三種に限られる(為手卑下は受手尊敬の反転であって、異種の敬語ではない)。それがいわゆる敬語の三分類の体系であって、その構造は成立以来全く変わることなく、用語のみを入れ替えて現代語まで受け継がれており、途中で体系が崩れたり、語句の用法が異種の敬語に変化したりすることは原理的にあり得なかったと思われる。従って聞手尊敬表現の成立も、話に関係するもう一種の人物たる聞き手の発見から必然的に求められたものであり、その用語もそれまでなかったものが偶発的に生じたり、あるいは一つの語の意味が変異したりしたのではなく、既存の敬語法の

にさまざまに想定されてもよかつたと思われるのである。

このように見てくると、少なくとも初期勅撰三集の詞書に使われた「侍り」は、さきに指摘した第一義としての聞手尊敬の裏に、その全例が程度の差は大きいものの、話題の中で聞き手の人物と対置される為手を、話し手が自分の側のものとして謙下する為手卑下を含意する可能性を有していたと言ふことができるのである。

三

次に、もう一つの問題について考えておきたい。上述のような含意が感じられるということは、各用例の語形だけによって決定されるのではなく、実は広義の文脈、すなわちその話の行われている場の状況や話自体の前後の脈絡によって規定される、話し手と聞き手それぞれの恣意に支配されるということである。

あらゆる言語表現は、そこに配列された語句のみによって成り立つものではない。その話の場で話し手・聞き手が何を話し聞こうとし、また既に話し聞いてきているかという流れに乗って、はじめて語句は意味を持つのである。そしてその流れに関わる話し手・聞き手の意識は、それぞれの恣意を完全に脱することは決してあり得ない。話し手がある語句にこめた意味を、聞き手は、その語句の最大公約数的な意味の可能性と、文脈から受け取れるその場の意味の方向、そうして聞き手自身の判断や感情などによって想像する以上のことはできない。特にこの「侍り」のように、語の意味自体に受手尊敬から聞手尊敬までと幅がある場合、個々の例にこめられた意味をその広い幅のどのあたりに特定するかということは、最後は話し手・聞き手それぞれの恣意に任されていることに注意したい。

もちろん、たとえば為手が話し手と同一人物である形では、ほとん

どの場合為手卑下が認められようし、無縁の第三者、特に自然物など無意志の事物などの場合は聞手尊敬のみと解されることが多いというように、語形・語義による意味表出の傾向の差異は大きくある。しかしそれは程度の問題を出ないことである。たとえば前掲1143の例で、話し手の撰者、聞き手の花山院双方が、義懐の姉娘の動作に（第一義の聞手尊敬に加え）為手卑下を感じていたこと、また62では聞手尊敬だけで、話題の中の「人」を話し手の立場でへりくだる意識は双方の心中に全くなかったことを、（両例とも多分そうであろうが）一〇〇%の確率で断言することはできないと思われる。

上に、為手卑下の含意が条件によって表出されると述べたのはこのことである。逆に言えば、一般に言語表現において個々の語句が保有する意味とは、その語句を用いて話し手が聞き手に伝えようとする表象、そしてそれとは独立に聞き手が話し手の意図として推察する表象を、このような条件に応じてさまざまの程度で示現する可能性のことだと言えよう。そのような「意味」として、「侍り」は、受手尊敬から聞手尊敬にまたがる話し手の敬意を表現してきた。その中で新出の聞手尊敬の意味は、既に古今集の時代から「侍り」の第一義として確立されたのに対して、原義の為手卑下Ⅱ受手尊敬のほうは、個々の話において、話し手と聞き手が別々にそれを感じたり感じなかったりする無数のケースを通じて、次第にその影を薄くしつつあった、と考えられるのである。

しかし、それは完全に消失することではなく、現代語にまでその残像を揺曳していることが指摘できる。たとえばいわゆる丁寧語を使った表現のうちでも、

・私ガヤリマス。

・私ハ山田デゴザイマス。

に侍りながら音もし侍らざりければなど。

前稿では一応、1143では東院の主、564①②では国司・郡司たれとの勅命の主、また1134①では京の支配者としての、話題中の花山院（「天皇一般」）に対する受手尊敬を想定した上で、

62 荒れはてて人も侍らざりける家に……

1245 ……浜づらに貝の侍りけるを見て

などには尊敬対象が考えられない点を挙げてその想定を否定し、これらの諸例においても聞手尊敬が第一義と判定した。

しかし直接の尊敬対象がなくても為手卑下だけで敬意を表現できるのであれば、これらの例にも帝威の前に謙下する気持ちがこめられてもよいわけである。第一義が既に、話し手が眼前の花山院を敬う聞手尊敬になっていることは疑いないとしても、その裏にその前身である為手卑下が、帝威の前にへりくだるという気持ちで併存している可能性も、やはり認めてよいと思われる。

しかし私は、それにとどまらず次のように考えるものである。為手卑下の含意は、既に相対敬語が確立されていたこの時代にあつては、必ずしも天皇・朝廷という権力的な支配者に対する場合に限らず、一般人同士の会話の中でも自由に行われるようになっていたと思われる。相対敬語においては話し手の主観的な敬意が、それぞれの対象に向けて表現される。話題中である人物を高い位置に置こうとする意識が徹底すると、その反転として、それ以外のものをすべてそれと対立する存在として、相対的に低めてとらえるという図式が成り立つ。この場合使われる動詞がその敬うべき人物を動作対象とする他動詞ならば、本来の受手尊敬が型通りに表現されるが、それが自動詞などの場合にも、為手卑下だけでその気持ちを表現できるのは上に述べたと

おりである。こうして、話題内に取り込まれた聞き手に対置されるすべてのものを、同じく話題内で聞き手と向かい合う話し手がわが方のものとしてへりくだること、結果的に話題外の話し手と聞き手との間に聞手尊敬表現が成立すると考えられるのである。

このことを前掲の例にあてはめれば、まず564①・1134①などは、話し手が一般的に敬意を向けようとする聞き手が、この場合は花山院であつたというだけのこと、特に天皇の絶対性を意識する必要はないことになる。勅撰集詞書にはその性格上、話し手、聞き手が話題中の為手、受け手と一致する例は原則として存在しないが、他の資料には一般人同士の対話としてこの形がごく普通に見られる。それらの例のことごとくが最も自然に、互いに話し手の立場を為手卑下することで聞き手に敬意を表する意に解されるものであることを指摘しておきたい。

それらに対して62・1245などにおいては、為手は一見話し手とは無縁の人物や自然物などであつて、これらのものをへりくだっても話し手自身の謙下にはつながらないように思われる。しかし上述のように、聞き手を高めるために対置されるすべてを卑下するという図式を想起すれば、これらの例にも条件によつては、聞き手を高めるための為手卑下を想定することもできたとと思われる。具体的に言えば、たとえば62の場合は、「コレカラ私ガオ話シスル家ハ」荒レハテテ人モ住ンデ居リマセンガ、ソノ家ニ……」といった、また1245では、「作者ガ出カケテマイリマス道ノ」浜辺ニ貝ガゴザイマシタノヲ……」といった、迂回した間接的な形ではあつても、話し手が為手をわが方に引き寄せてへりくだる気持ちをこめて言い、それを聞き手が感じ取ることもあり得たのではなからうか。為手卑下のみによつて高められる聞き手は、為手の動作の直接の対象ではなく、話題の中で為手と間接的に対置関係に置かれるだけのものとすれば、その間接的関係の内容は自由

ノ側二伺候スル」の意の場合だけは、例外的に他動詞とも見得るが)。またこの語が補助動詞として付く上接語も、前稿に例示したように、動詞は自動詞ないし他動詞でも「(月ヲ)見る」「(歌ヲ)詠む」のように動作対象と直結して意味が完結しているものが多い。その他は形容詞や助動詞に含まれる「あり」の敬語化である。このように「侍り」は、基本的に受手尊敬語法のための尊敬対象を設定しにくい、すなわち受手尊敬を表現しにくい語である。

にもかかわらず、たとえば前稿に挙げた、

1143 権中納言義懷入道して後、女の斎院に養ひ給ひけるがもとより、東の院に侍りける姉のもとに、十月ばかりに、遣はしける

などの例において、第一義として指摘した披講の聞き手花山院への間手尊敬に重ねて、話題の中の「東の院」の主たる花山院への敬意も濃厚に感じられるのはなぜであろうか。私はそれを、「侍り」が受手尊敬の反転である、話し手の敬意表現の感覚としては同質の為手卑下の意味を表す故と考える。

話し手が話題の中で、動作の対象となる人物を高めて扱うこと(受手尊敬)と、その動作をする主体の人物を低めること(為手卑下)とは、話し手の心中における、その動作のいわば「傾斜」、すなわち一つの動作の両端の人物の上下関係を認識する感覚としては質を同じくする。話し手が動作の受け手に向ける敬意は、相対的にその動作の為手を卑下することと共通の心情であり、受手尊敬として動作の対象を待遇する言い方は、そのまま為手卑下として動作主をへりくだる意味も表現し得たのである。「謙讓語」の名称もそこに由来するのは言うまでもない。その謙意は特に、受け手の人物が話の聞き手と、為手が話し手と一致する場合に最も強く感じられる。

そうしてこの「為手卑下＝受手尊敬」ということが一般化すると、

自動詞など、話題中で為手が直接受け手に働きかける意味を持たない語においても、その為手を卑下するだけで、謙讓語として話し手の敬意を表現できるようになる。この場合の敬意の対象は、話題の中で、(直接動作を受けることはないが)何らかの意味で為手と対置される人物であり、多くの場合、話の聞き手と同一人物である。

このような事情のもとで、自動詞的性格の強い「侍り」は謙讓語として用いられたと思われる。そうして、その敬語化以前の「あり」の表した種々の意味に応じて、動詞のみならず補助動詞としても広汎な用法を獲得することになったものであろう。さらに、動作の直接の受け手を必要とせず、為手卑下だけで受手尊敬と同質の敬意を表す機能は、それを応用して話題外の聞き手を待遇する新敬語の使用範囲を大きく広げることになり、「侍り」は謙讓語の丁寧語化の代表として盛行することになったと思うのである。

このような見方で、これまで見てきた拾遺集詞書中の諸用例を見直すと、さきにすべてが披講の聞き手花山院を高める間手尊敬を表すと判定した例の大半が、それと並んで一方で、話題の中での動作主体をへりくだる気持ちを併有していると解されるのである。

この為手卑下の含意が最も強く感じられるのは、為手が話し手と同一人物の場合であるが、勅撰集詞書の通例として、話し手である撰者が為手である(他人の)歌の作者の作歌行為を説明する形式であるため、拾遺集中にこの形は見当たらない。しかしながら、この形ではなくても、為手卑下の含意を指摘できる例は多数見出されるのである。

まず上記の1143に加えて、前稿で見た次の諸例について再考する。

564 ② 大隅守桜島の忠信が国に侍りける時、郡の官に頭白き翁の侍りけるを召しかむがへんとし侍りける時、翁の詠み侍りける

1134 ① 藏人所にさぶらひける人の、氷魚の使にまかりけるとて、京

「下臈」は、地位とはいふものの、下級の階層を漠然とさす語で、天皇の権威の前に謹んで拝命するといった語感からは遠い語といえよう。このようにどちらにもつながる中間例があるということは、官職と上記の「わらは」や「伊勢が腹」とが意味的に連続していることを示すと思われる。とすればこれら官職に付いた例も特別視せず、「に・侍り」の「に」は断定、従って「侍り」は聞手尊敬を表すとするのが無理のない見方であろう。

最後に類例として「に・て・侍り」という形を見ておきたい。

317 源嘉種が参河介にて侍りける、女のもとに母の詠みて遣はしける

552① 天曆御時、一条摂政藏人頭に侍りけるに……

この場合の「て」は前述の完了ではなく、断定「なり」の連用形を受けた接続助詞であるが、この「て」を重視するところで叙述が一息入れる感じになり、結果として「侍り」の動作性が強まって、「居住スル」「主体的ニ存在スル」、さらには上記の「謹肅伺候スル」といった動作的な意味を表す可能性が出てくる。

しかしながら他面、前出の完了の「て・侍り」の「て」は、この接続助詞と語源を同じくするものであるが、それらの中にも完了の意味が極めて軽く、「て」を欠く形とほとんど意味の変わらない例が散見された。また、断定「なり（↑に・あり）」に当たる現代語は「デアル・ダ」であるが、その語源は「にてあり」で、この場合の接続助詞としての「て」の意味はほとんど無に等しいと言えよう。それらのことを踏まえて、ここでは「に・て・侍り」は、上述の「に・侍り」と同義の、断定「なり」の聞手尊敬と判断しておきたい。

二

以上、拾遺集詞書中の「侍り」に関して、本稿では完了の「たり」、打消「ず」のザリ活用、形容詞のカリ活用、そして断定の「なり」に含まれる「あり」の敬語化について、また前稿ではそれ以外のすべての用例について、話し手の敬意がどのように働くかという観点から調査してきた。結果は、「侍り」がどのような動作的意味の動詞として、あるいはどのような語に下接する補助動詞として使われるかにかかわらず、敬語としては、第一義的に聞き手に対する話し手の敬意を表現するために使われていることを観察し得た。このことは古今、後撰両集について調査した結果と全く変わらず、ここに、現代語で全盛を誇る聞手尊敬表現はこの「侍り」を嚆矢として、この時代に成立・発展・確立され、後世のさらなる隆盛につながったことを明らかにしたいと思う。

それではこの「侍り」の表す意味は、その原義と思われる受手尊敬をこの時代既に捨て去って、聞手尊敬のみを表す語になりきってしまったのであろうか。以下、このことについて考察を深めていきたい。

既に古今、後撰両集についての報告でも指摘してきたことであるが、拾遺集詞書中の多くの例についても、第一義として観察された、撰集奏覧の場における、発言者（話し手）たる撰者の下命者（聞き手）花山院に対する敬意の表現である聞手尊敬の裏に、同じ花山院を話題の中に取り込んで尊敬対象とする敬意が漂うのを、私は否定できないのである。

ここで改めて「侍り」の表す受手尊敬の内容について考えてみたい。「侍り」は本来、動作対象を持たない自動詞である（最原義の「貴人

に考えることもできよう。しかしこの場合は、女房とし子が元良親王の問いに答えるものであつて、臣下同士の対話は拾遺集中には他に見られない。その点から前稿では、これらを間接話法の中の花山院に對する間手尊敬と考へてみたものである。今仮に臣下同士の会話の直接引用として見た場合、ここに受手尊敬を感じるとしても、その尊敬対象は臣下の元良親王であつて、これまで見てきた、詞書の聞き手花山院に對する受手尊敬の可能性とは次元を異にする。これについては、後に問題を拡大して考察することにした。

(6)

断定「なり」の連用形「に」十「侍り」

最後に、断定の助動詞「なり」を、その連用形「に」とそれに陳述性を与えるために付いた補助動詞「あり」とに分解し、その「あり」を敬語化してできた「(名詞十)に・侍り」の形について考える。

この形は、前稿で検討した、

(場所を表す) 格助詞「に」十(「存在スル」意の) 動詞「あり」の敬語化「侍り」

と同形である。この同形異義の区別は、「に」に上接する名詞について言えば、それが文の主語の存在する、あるいは動作をする場所の意の場合「に」は格助詞、主語の内容と同定される場合は断定である。またその区別は「侍り」の意味によつてもなされ、存在・居住、さらには謹肅伺候といった広義の動作の意味であれば「に」は格助詞、「侍り」に動作性が感じられず、「に」を陳述化するだけの働きなら断定ということである。そうして断定の場合は、動作を表さない故にその受け手も存在しないわけで、基本的に受手尊敬とは無関係ということになる。以下、諸例について検討を進める。まず、

553 ① ……右大将実資がわらはに侍りける時……

1054 ① 敦慶式部卿の親王の女、伊勢が腹に侍りけるが……

それぞれ「実資」「敦慶親王の女」が「わらは」「伊勢が腹」という状態・立場にあつたことを言うもので、「に・侍り」は断定「なり」の敬語化であり、その敬意の対象は話題外の花山院であることは明らかである。

次に、拾遺集詞書には、次のように官職・官位に「侍り」の付く形が計一二例ある。

282 ① 一条摂政中将に侍りける時、父の大臣の五十賀し侍りける屏

風に

583 ① 津の守に侍りける人のもとにて詠み侍りける

758 ① 侍従に侍りける時……

1027 ② ……六位に侍りける時

他に 332 ①・538 ①・556 ①・557 ①・633 ②・1179 ①・1162 ①・1220 ①・1222 ①

これらと同形の、特に古今集の詞書中に見られる例について、「に」は断定でなく「ソノ任ニアッテ」の意の格助詞、「侍り」は「ソノ任ニ恭順伺候スル」の意の動詞であると説く説がある。たとえば282 ①を「一条摂政伊尹ガ中将トシテ(帝ニ)オ仕エシテイタ時」と解するものである。しかし私としてはこの説に従えないことは旧稿に述べたとおりである。ここにその論議を再述することは避けるが、少なくとも拾遺集においては、上記の553 ①や1054 ①のように、「帝威ノモトニ謹肅シテ……」という意味には解し得ない例がある以上(公務以外の私的な関係や立場に付く形は既に後撰集から見られた)、官職に付いた形も含めて一括して断定と解するのが自然と思われる。また、次のような事例もある。

1026 右大将実資下臈に侍りける時、子の日しけるに

懸想し始む 〈男ガ女ニ〉 1267 ①

(iii) 助動詞「ず」・「る」・「て」・「侍り」

生ま・す 〈女ニ子ヲ〉 592

張ら・る 〈薄物ガ扇ニ〉 1088 ①

取ら・る 〈官職ヲ〉 481

最後の例は、

481 官^{つかさ}取られて侍りける時、妹の女御の許に遣はしける

というもので、作者平定文が一時解任されたことを言ったものである。官職を取り上げる朝廷・天皇に対して受身の動作を働きかける意の受手尊敬の可能性も考えられるが、前稿で「流され侍り」について考えたのと同じ理由で、ここでも聞手尊敬が第一義と解しておきたい。

以上で「て(完了)・侍り」の検討を終わり、次に、打消の助動詞「ず」のザリ活用を敬語化した形を見る。

643 女のもとに男の文遣はしけるに、返り言もせず侍りければ

他に、758 ②・950 ③・1193 ④・1194・1262 ②

言うまでもなく「返り言もせざりければ」の「ざり」に含まれる「あり」を敬意を含む「侍り」に置き替えたもので、その敬意の対象は話題中の「男」「女」とは考えられない。拾遺集詞書中の他の五例もすべてこれと同じく、(特に高貴ではない)男女間の交情(の衰え)を言うもので、全例が話題の内容に無関係に、聞き手花山院を高める聞手尊敬であることは明らかである。

次に、形容詞カリ活用に含まれる「あり」を敬語化したものは、次

拾遺和歌集詞書と聞手尊敬語「侍り」(下)

の八例である。まず、

950 ② もの言ひ侍りける女の、後につれなく侍りて、さらに逢はず侍りければ

1193 ② 年月を経て懸想し侍りける人の、つれなくのみ侍りければ、

……

(950 ② に対して 1193 ② は、同じ「つれなく」を「のみ」を挟んで受ける形であるが、この二つの言い方における「侍り」の意味に差異があるものかは、ここでは問わないでおく。)

244 ③ ……(女ガ)うとく侍りければ

1193 ② ……もと親しく侍りける男の……

の四例は、上述の「ず・侍り」の場合と同じく、男女の仲を言うものであつて、そのどちらに対しても受手尊敬を用いることはあり得ない。また、

1146 ……冬の夜の月おもしろう侍りければ……

502 神明寺の辺に無常所を設けて侍りけるが、いとおもしろく侍りければ

1248 まうで来ることかたく侍りける男の頼めたりければ

1146 は自然物の「月」、502 は「無常所」という造営物、1248 は「(女ノ所へ)来訪スルコト」という行動内容について、それぞれにその事物自身のある方を言うもので、いずれも話し手にとつての尊敬対象を見出し得ない形である。

最後に、

510 ② 元良親王、承香殿のとし子に「春秋いづれかまさる」と問ひ侍りければ、「秋もをかしう侍り」と言ひければ、おもしろき桜を「これはいかが」と言ひ侍りければ

も、「秋」という自然現象について言っている点で、上の三例と同様

- 描く 〈絵ニ物ノ形ヲ〉 248・1124^②
 付く 〈祝賀ノ景物ニ歌ヲ〉 266、〈子ニ名ヲ〉 1178
 作る 〈竹ノ杖ヲ〉 276・296^③
 当たる 〈七夕ガ庚申ニ〉 152
 映る 〈水ニ〉 203^②
 置く 〈死骸ヲ〉 1325
 着る 〈衣ヲ〉 422
 くふ 〈巢ヲ〉 531^①
 乞ふ 〈作者ニ品物ヲ〉 1063^②
 挿す 〈花ヲ〉 1050^①
 す 〈賭物ニ草子ヲ〉 553^②
 添ふ 〈女ガ男ニ返ス調度ニ、枕ヲ〉 1258^②
 契る 〈男ガ女ヲ〉 1184
 遣はす 〈使者ヲ友人ヘ〉 535^① (前出)
 とぶらふ 〈人カ作者ヲ〉 1311^②
 設く 〈施設ヲ〉 502^①
 詠む 〈妻ガ夫ヘ歌ヲ〉 352^②

(ii) 複合動詞十「て・侍り」

以下に示すように「て・侍り」は、複合動詞に下接する形が、前稿の「侍り」が「て」を介さずに直接する場合に比べて比率が高い。その理由は未詳であるが、あるいは語義よりは語調の問題かとも想像される。単一の動詞に「侍り」が付く形は一文節の感覚で発音されるのに対して、語形の大きな複合動詞の場合は「て」まで言つて一息入れた上で「侍り」が付くという感覚である。

(霧ガ) 立ち渡る 1288・193^②

- 生ひ出づ 1281^③
 咲き乱る 62^②
 散り積む 1055
 散り残る 1063^④
 降りかかる 245
 書き付く 〈歌ヲ、包紙・枕箱・家屋・立木ナドニ〉 469・1180^③・1209・
 1268・1330・1344
 言ひおこす 〈歌ヲ、夫ガ妻ヘ〉 351^②、〈男ガ女ヘ〉 1074^②、〈左大臣ガ親王ヲチヘ〉 1165^②
 右のうち、最後の例は、
 1165^② 冷泉院の五、六の親王^{みこ}袴着侍りける頃、言ひおこせて侍りける

というもので、作者の左大臣道長が冷泉院の第五、六皇子に、その袴着を祝つて詠み贈つた歌の意である。対象が親王たちなので受手尊敬とも考えられるが、勅撰集詞書では天皇・中宮・東宮以外に敬語を用いないという原則に照らして、聞手尊敬と判定しておく。

あひ知る 〈男ガ女ヲ〉 1205^①・1333^②
 「あひ知る」の「あひ」は接頭語であるが、ここでは動詞を重ねた他の複合動詞と一緒に扱っておく。

- 言ひ入る 〈男ガ女ノ許ニ〉 912、〈女友達ガ作者ノ許ニ〉 437
 言ひ契る 〈男ガ女ニ〉 1222^②
 織り付く 〈歌ヲ布ニ〉 1088^②
 書き置く 〈歌ヲ畳紙ニ〉 1332
 眺め出だす 〈采女ガ外ヲ通ル男ヲ〉 1220^②
 見馴る 〈女ガ男ノ従者ヲ〉 1253^①
 結び付く 〈歌ヲ衣ニ〉 1294

次に、いわゆる謙讓語に「侍り」が下接した場合を見る。まず「ま
かる」に「て・侍り」の付いた形、

1137 十月ついたちの日、殿上の男ども嵯峨野にまかりて侍る伴に
呼ばれて

「まかる」+「て・侍り」他に、438・1339^③

528 健守法師仏名の野伏にまかり出でて侍りける年、言ひ遣はし
ける

「まかる」を冠する複合動詞+「て・侍り」他に、36・315^③

などについては、前稿に述べた、

305 天曆御時、小式命婦豊前にまかり侍る時、台盤所にて餞けさせ
せ給ふに、かづけ物賜ふとて

737^① 源公忠朝臣日々にまかり会ひ侍りけるを、いかなる日にかあ
りけむ、会はざりける日、遣はしける

などと同様に、受手尊敬の気持ちを感じられることがあるとしても、
その表現は「まかる」に任せ、「侍り」は聞き手のみを高める働きを
しているものと考えたい。

また、「詣づ」やその複合動詞に付く形も、

534^① 賀茂に詣でて侍りける男の見侍りて、「今はな隠れそ。よく
見てき」と言ひおこせて侍りければ

他に「まうで逢ふ」+「て・侍り」1211^①

前稿の、

563 御岳に年老いて詣で侍りて

などにならうて考えることができる。「(て)・侍り」が補助動詞とし
て受手尊敬を表すのは、その尊敬対象が上接動詞の動作対象と一致す
る場合である。しかし「詣づ」は神仏に参詣する意で、花山院に対す
る動作ではなく、院への敬意は聞手尊敬の「侍り」で表現するしかな

いのである。

以上、動詞に下接する「て・侍り」のうちで、受手尊敬とも見える
例について、そのすべてがやはり聞手尊敬を第一義とすべきであるこ
とを見てきた。これら以外は一見して聞手尊敬とされるものである
が、その全例を以下に、「て」の上接語、すなわち「たり」として下
接した動詞によって分類して、その歌番号を示す。どの動詞も、自動
詞であるか、他動詞であつてもその動作対象が聞き手の人物と一致し
ない語、すなわち聞き手以外に尊敬対象を想定し得ないものばかりで
ある。

(一) 単動詞+「て・侍り」

亡くなる 1285^①・1303・1305^③・1309^①

咲く 1015・1309

成る 544^②・588^③

荒る 138

移ろふ 1123^③

居る 532^②

おこす 〈妻ノ許へ使者ヲ〉498、〈女へ歌・紅葉ヲ〉653・1269、〈知人ガ

作者へ使者・歌ヲ〉501^②・1094

言ふ 〈親王カ女房ニ〉510^③、〈友人ニ〉535^③(前出)、〈孫ガ祖母ニ〉

545^③、〈女ニ〉1263^④

宿る 〈宿所ニ〉382^①・484^②・1180^①、〈月ガ水ニ〉172

逢ふ 〈人ニ〉540^②・1267^②、〈親ノ喪ニ〉1140

出だす 〈食物ヲ〉1128^①・1128^②、〈枕ヲ〉1190^①

後る(死ニ後レル) 〈妻・女ニ〉434^①・544^①、〈親ニ〉1301^①

書く 〈歌ヲ作者へノ文ニ〉588^②・〈記事ヲ家集ニ〉1322^③左注

紛らわしさを避け、また既に使っている「為手尊敬」との整合も考えて、今後はもっぱら「受手尊敬」を用いることにしたい。馬淵和夫先生の「動作主尊敬・対象尊敬」と玉上琢彌博士の「為手尊敬・受け手尊敬」とにどのような差異があるかは問わず、本稿においては、「対象尊敬」、「受手尊敬」、それに学校文法に言う「謙譲」を、いずれも全く同等の「話題の中である動作を受ける人物に対して、話し手が敬意を表す」敬語の意で用いることにしたい。

一 (続き)

前稿は、補助動詞として他の実体動作を表す動詞に下接する「侍り」の検証までで筆を置いたが、本稿はそれに続けて、同じく補助動詞としての、助動詞「たり」「なり」「ざり」や形容詞カリ活用などの語尾に含まれる「あり」が敬語化した「侍り」について検討を進める。

(5)

完了「つ」の連用形「て」「十」「侍り」

助動詞「たり」は「つ」の連用形「て」に陳述性を与える「あり」が熟合したものであり、従って「て・侍り」は「たり」の敬語化であるの言うまでもない。この用法の「て・侍り」は拾遺集詞書中に全一〇一例を数え、前稿(4)の動詞に直接する補助動詞の用法二五九例に次ぐ多数を示す(この他に同じ形で、(6)に挙げる断定の意に解される二例がある)。それらの例のすべてが、少なくとも第一義としては、聞き手の花山院を高める聞手尊敬として働いていると考えられる。たとえば、

535①③ 能宣に車の氈^{かも}を乞ひに遣はして侍りけるに、「侍らず」と言ひて侍りければ

の①・③は、それぞれ「遣はしたりけるに」「言ひたりければ」の敬語化である。この場合「遣はす」は歌の作者藤原仲文が自分の従者を大中臣能宣の所へ、「言ふ」は能宣が「侍らず」という言葉(使者を通じて)仲文に、という関係で、それぞれ話し手が受手尊敬で待遇しなければならぬ人物に対する動作ではない。とすればこの場合の敬意の対象は、話の聞き手花山院以外には考えられないのである。

ただし、集中の全例がこのように、話題中の人物の関係から一見して聞手尊敬と判断されるというわけでもなく、一部には若干の考察を要する例も存在する。しかしながらそれらもすべて、前稿(4)で動詞に直接する「侍り」について考えたことをあてはめることで、次のようにやはり第一義は聞手尊敬と判断されるのである。まず、

352① 笠の金岡が唐土に渡りて侍りける時、妻の長歌詠みて侍りける返し

1049 上総より上りて侍りける頃、源頼光が家にて人々酒たうべけるついでに

などの形は、前稿に挙げた「て」を欠く形、

318① 兼盛駿河守にて下り侍りける、馬の餞^{はなむ}けし侍るとて

315① 伊勢より上り侍りけるに、……

と同様に、「勅命ヲ奉ジテ」「帝ノシロシメス京ニ」といった意味で、背景に天皇の権威を想定しての受手尊敬という解も成り立ちそうである。しかし一方で、

332② 藤原雅忠が豊前守に侍りける時、(子ノ)為頼がおぼつかなしとて下り侍りけるに、馬の餞けし侍るとて

のように、全く同じ形ながら、特に帝威の背景という尊敬対象を感じさせない例も見られることからすれば、上掲の例も第一義は聞手尊敬と解するのが妥当と思われる。

拾遺和歌集詞書と聞手尊敬語「侍り」(下)

田 所 寛 行

はじめに

私は^①一連の旧稿において、初期勅撰和歌集の詞書を資料として、平安前期に発生したいわゆる丁寧表現(聞手尊敬)の成立・発展の事情を観察してきた。勅撰集詞書は、少なくとも初期のものは、撰集奏覧の場で、披講の講師(おそらく撰者自身)が撰集下命者たる天皇に対して直接に、それぞれの作歌の事情を紹介、言上した言葉であると考えられる。とすれば、当時の口頭語の姿を如実に反映しているはずであり、口頭語のみに行われる聞手尊敬表現の調査には格好の資料と言えるからである。

調査対象は順を追って、前稿「拾遺和歌集詞書と聞手尊敬語『侍り』(中)」では第三勅撰和歌集の拾遺集に移し、先行の古今・後撰両集と同様に、詞書中に用いられ、聞手尊敬を表現していると思われる動詞・補助動詞「侍り」について調査を進めた。しかし前稿は、個々の用例における「侍り」の表す敬意の具体的な検討の途中で紙数が尽きて、やむを得ず中断した。

本稿の目的は、まずその中断後を補うことである。すなわち「侍り」の敬意を、個々の語例の文法的用法別に検討する作業において言い残した部分、補助動詞としての機能のうち、助動詞「たり」「なり」「ざり」や形容詞カリ活用に含まれる「あり」の敬語化についての検証結

果を報告する。次いで、それらを含めて拾遺集全体の「侍り」の使用実態を想起しつつ、改めてその受手尊敬から聞手尊敬への応用の経緯について考察を加えることにする。

これに残された語例についての検証の結果は、前稿で拾遺集の大半、さらには旧稿で古今・後撰両集について得られた結論と完全に一致するものである。こうして、一連の論考に述べてきた、聞手尊敬表現成立の過程を「侍り」をはじめとする既存の受手尊敬表現の応用と見る私の考えは、ほぼ確認し得たものと思う。

「侍り」の本質については、早くから多くの有力な論考がなされている。それぞれの主張はさまざまであるが、その多くは「侍り」の意味を広義の自己謙下とした上で、それを他の謙譲語とは異質の特別なものととらえるか、あるいはもう一つの意味の「丁寧」(聞手尊敬)とは区別して扱うか、という方向で大約できよう。

しかし私は、「侍り」の謙意は、最初から話し手が聞き手に対して直接に自らをへりくだる意味としてあったのではなく、まず話し手が話題の中で、受手尊敬の反転として、その動作の主体を相対的に低めて扱う、(素材敬語としての)為手卑下があり、それを応用して受け手に聞き手の人物を、為手に話し手自身を重ねることで、聞手尊敬の効果求めたものと考ええるものである。

なお稿中の用語として、これまで「対象尊敬」の語を用いてきたが、